

新潟の思い出

天野幸治

思い出というのは、石沢君がオートバイで新潟の山を走りまわっていた当時のことで、どこかで野宿して、朝、寝床を片付けたら、寝床の下でガマがいくつかくっつきあっていてという話をきいたことがあった。この話を思い出すと、腰をかがめてガマをのぞいている石沢君と、寝床をめくられて寒そうに石沢君を見上げているガマの光景が絵のように出て来る。

この話の頃から何年たったのか。私はすっかり年とってもう山に登れない。今朝も目がさめてから2時間余りも、意気地のないことだが、寝床から起きられないでぐずぐずしていたら、石沢君のことを思い出した。それがきっかけになって、やはり植物を大好きで、始終植物のことを考えている人や考えていたような人のことを思い出した。そんな人のことを書いたりすることは、植物保護につながっているように思う。石沢君にいつか「新潟県植物保護」に何か書かせてほしいと約束みたいにいっただことも果たせるように思う。ここに書くことは一人よがりかも知れんが、私にはどれもなつかしくて大切な思い出である。

石沢君が結婚したのは大雪の年で、結婚式に稲田先生に出て頂くことを御願いしようと、石沢君と二人で栃尾に行った。電車をおりたら二階の前を歩くような雪道であった。電信棒

を伝って二階に出入りするなどと聞いて来た新潟の大雪を初めて知ってすごいものと思った。稲田先生の御宅に行ったら、先生は血を吐かれて入院しておられた。病院にまわってお見舞も挨拶もろくにすまないうちのように思うが、先生は、サクラのことだか話し出された。意気込んで話されるので、御身体に悪いことが心配で、早く御話がとぎれるようにと願いながら聞いていた。御願いの件を持出すどころではなく、病室を出て二人でほっとした。その時であったか、他の時であったか、新潟の景色は淋しいので、汽車の沿線にサクラを一杯植えたいと計画を話された。その準備をされていたと思うが、どうなっているのであろうか。

その頃のことであったが、関君と石沢君と三人で守門岳の手前の山に登って、夕暮れ近く栃尾におりて来た。稲田先生を訪ねようと御宅に伺った。石沢君がツバキの実をほしがっているのをきかれると、先生は早速身支度して、郊外の寺にいそいと案内された。「先生、これからお勉強ですか」と先生に挨拶して通り過ぎる人がいた。寺に着いてツバキの下に立ったが、梢は暗いので、先生は寺でろうそくをもらって来られた。誰が木にのぼったかおぼえていないが、ろうそくに火をともしてさがしたけれど、実は一つも見付からなかつ



新潟県天然記念物 赤谷十二神社の大樫 (1990. 5. 7)



新潟県天然記念物 岩崎のカツラ (1990. 5. 8)

た。鳥だか虫だかが居なくて実がならないとの話も出ていた。

いつの年であったか、新潟大学の学長室によび出されて行ったら、人事院の佐藤先生がおられて、村松の奥を案内せよとのこと。案内といっても、植物の大先生に植物の案内するなど私にできる筈もなく困ってしまった。そのあげくの名案であったと思うが、石沢君と坪谷さんに同行して頂くことになった。翌日は石沢君の案内で早出川の上流に行ったと思うが、どんな採集があったかまるで記憶しない。その晩村松の旅館で佐藤先生が腊葉にされるのをみていた。その翌日は車で村松から加茂を通過して長岡に出た。加茂で坪谷さんの家に行ったら、道路修理の工事に出ておられて留守であった。しかし坪谷さんの家のまわりをとりまいて植わっている植物を佐藤先生は興味深く見ておられたようである。それから道路工事の仕事中の坪谷さんを見付けて、加茂神社の境内を案内して頂いたのであるが、佐藤先生はこの境内の植物を、また坪谷さんの案内を喜ばれたようであった。

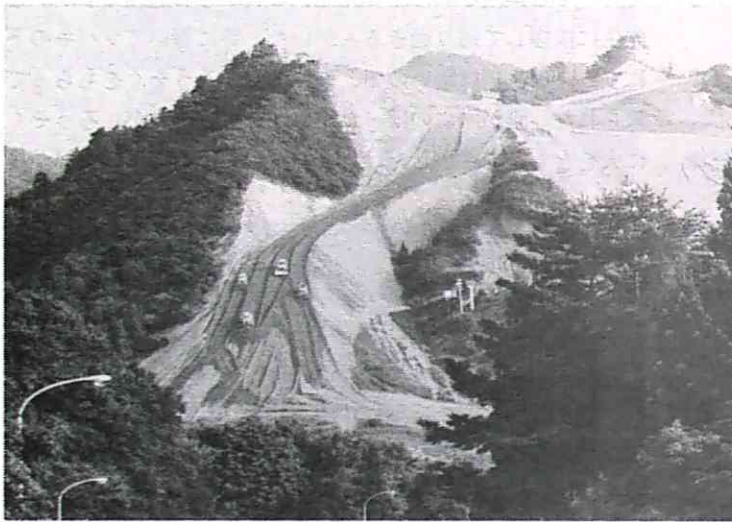
それから、予定の時間に大分おくれて長岡に着いたが、稲田先生も待っておられた。稲田先生と佐藤先生とは前からの御知り合いで、御二人でどんな話を交わされたか、どんな採

集をされたか、残念ながら皆目おぼえていない。

ただ、御二人が悠久山の道のない斜面を山登り競争でもするように、採集はそっちのけで、荒い息音をされながらのぼられた様子が今も目に浮かぶ。どうしてあんなに張合われるようなことになったのか。どちらが先にのぼられたかもわからない。のぼりきると御二人ともやれやれというようにして汗をふいておられた。今思い出してもほほえましい光景で、私はその時つい笑ってしまったことをおぼえている。

昨年頃から老木木を見て楽しむことをおぼえたので、そのことで何か書けないかと思ったが、まとまりそうもない。一言だけ感想をのべさせて頂く。本か新聞かで大木の所在を知って見に行くのであるが、行ってみたいいつも大きいと思う。よくもこんなに生きたものだと思う。太い枝を地面に殆ど平行に出しているようなのをみると、こんな重いものをよくも支えていると思う。夏の暑い日など、夥しい数の葉や小枝の先々が萎れないでいるのをみると、幹の中を水が音をたてて吸上げられているような気がする。大木をみに行くと、いつもこんな風に圧倒されたような気持ちになって帰って来る。そしてまた見に行こうと思う。(元新潟大学農学部教授)

改変される自然



スキー場整備(黒川村胎内) 1991. 6. 8



ダム建設(下田村大江) 1991. 7. 1

享月 日

1991年(平成3年)4月18日

ペースケ 園山俊二

